

宇宙の仕組み、星々の成り立ちを知る



▲授業終了後、質問コーナーが設けられました。「ブラックホールは何個あるの?」「宇宙人はいないの?」「宇宙の隅っこはどうなっているの?」「宇宙の匂いは?」「地球以外に住める星はあるの?」など、またとない機会に子どもたちからたくさんの鋭い質問が投げかけられました。



◀三ツ星天文台のスタッフから惑星や天体の説明を受ける様子。天体望遠鏡では、土星などの惑星が確認できたほか、超新星爆発により発生した星の跡なども見られました。



ながい ひろし
永井 洋 さん

★講師紹介★

- 神奈川県茅ヶ崎生まれ。
- 小学校5年生のときに両親から天体望遠鏡を買ってもらい、月や惑星に感動して天文学者を目指す。
- 現在、東京都三鷹市にある国立天文台に勤務し、ブラックホールに関係する現象を電波望遠鏡を使って研究している。
- 世界ではじめて、ブラックホールの撮影に成功したプロジェクトの一員

国立天文台の研究者が、天文学の授業を「出前」する事業「ふれあい天文学」。この事業は、国立天文台が国内外を対象に募集しており、川根本町として応募したところ、国立天文台職員の永井洋さんに来ていただきました。

1月11日(木)、12日(金)に、中川根中学校で開催され、11日は三ツ星小学校と本川根小学校の4年生から6年生の児童が参加し、12日は中川根中学校の2年生と本川根中学校の1年生・2年生が参加しました。

講演では、2024年10月に見ることができると予想されている「紫金山アトラス彗星」を題材に、彗星の構造や仕組みについて説明されました。後半は、プロジェクトを使用し、「国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクト(Mitaka)」で惑星の位置や太陽系の構造、銀河の成り立ちについて、宇宙における単位の数え方など専門用語を交えながら説明がありました。

夜は、三ツ星天文台で実際の星空を見ながら、永井さんやスタッフから説明を受けました。



"Mitaka"

最新の観測データや理論モデルを用いて、太陽系から天の川銀河、大規模構造といった、宇宙の階層構造をリアルタイムに可視化するソフトウェアです。地球から飛び立ち、観測されている宇宙の果てまでを自由に移動して、天体の運動や構造を観察することができます。

紫金山アトラス彗星とは



写真はイメージです

- 2023年に発見された彗星。
- 2024年の秋頃に太陽に近づく予想される。
- 2024年10月頃に夕方、西の空に見える予想される。
- マイナス5等級まで明るくなると予想されている(木星はマイナス2等級)。
- これほど明るい彗星は一生に一度しか見られないかもしれない。